回　顧　と　展　望

主は私の羊飼い
伝道開始から独立まで

岩　井　綾　子

俗に十年ひと昔と云いますが、それよりも十年ひと跨ぎと思う位に、この年月はいつの間にかさまざまな色彩の織り模様となって私の前を通り過ぎて行きました。あるところは鮮やかに、また薄く霞んだところもあって、このまゝ春日井教会の歴史に成り得ないかも知れませんが思い出を辿る事に致します。

昭和２７年４月、春日井市鳥居松町七丁目美園幼稚園を基盤として開拓伝道が始められましたのが、今日の春日井教会のそもそもの始まりでした。集会の時にだけ貸して頂くこの幼稚園のホールで、聖日の教会学校から朝夕の礼拝、祈祷会が順を追って始められました。

当時春日井市には教会が無かったので、在住の各教派に属す信者の方々が集って来て、礼拝も１５人前後の会衆で守られました。

藤本執事のお父様勝利氏がよく出席されました。加藤俊男氏御一家もこの時からのお馴染です。伊藤八重子姉、加藤靖子姉（水野）加藤望兄の方々は可愛らしい幼稚園児でした。

熱心な教会学校生徒として谷屋光恵姉がいらっしやいました。伊藤妙子姉も加藤常子姉に導かれて求道を始められました。加賀谷勢津子姉も高校生でした。この様な事をお話しすればまだいろいろの方がいらっしやいます。

最初の年のクリスマスに６人の受洗者が与えられて、ゼロからスタートした伝道所の初穂となりました。

この最初のクリスマスは青年男女が大変よろこんで、当日は朝から幼稚園や牧師館に出たり入ったりして準備に忙がしく賑やかでした。私達は最初の２～３ヶ月を幼稚園の二階で暮し、７月の末に月見町の家（ミッションにて買入れ修理したもの）へ移りました。

主人は米国南ミッションの協力教師として春日井に来たのです。北陸の教会で信仰の不一致に悩んだ末、教会ぐるみ改革派に移行する事を諦め、単身神戸の神学校に６ヶ月勉強に戻っての後の事でした。どうしても自分で教会を立てたい一念に燃えておりました。

この最初のクリスマスに教会の方々から主人はマフラーを頂きました。冬毎に大事に使用して今ではすり切れてしまいましたが、大に召される１～２年前まで、伊吹颪しの吹きすさぶ季節中、自転車やオートバイで走る時主人の首をあたゝめてくれました。今では吾が家の記念として大切にしております。

前後しましたが、その年の秋の伝道会は大変なものでした。広い幼稚園のホールは超満員で７０人からの聴衆を前に熱弁を振われた

のは橋本亘先生でした。（現四国南与力町教会）

又市内の各宗教が連合して講演会を開いたこともあります。会場は鳥居松旧道の藤村屋呉服店の前あたり、明治天皇御行在所跡の建物で、仏教、神道、キリスト教がそれぞれ講師を立てゝ講演をしたのですが、その時はキリスト教からは老練な杉山豊胤先生が講師として選ばれ、秋の一日を意義深く送りました。確かそこの庭には柿が真赤に熟れておりました。

真珠湾攻撃に出陣し、後に人信されて各地を廻って回心のあかしをされて居られた淵田氏にも講演に来て頂きました。この時は中部中学校の講堂を借りました。

教会学校も子供達で溢れて、教師が不足し、何も彼もが人手不足の頃でしたが、幼稚園の庭で運動会をしたり、夏の夜は幻燈会もよく致しました。

伝道のブランチは坂下にも熊野にも高蔵寺にも延びておりました。

坂下では藤本勝利氏宅。

熊野では加藤俊男氏宅。後に伊藤妙子姉宅。

高蔵寺では渋谷眼科医院で集会が持たれ、後に公民館に移りましたが、この集会からは数人の若い姉妹方が受洗され、その中に藤本執事夫人、糸江姉がいました。

後の事ですが高蔵寺では、高蔵荘で教会単独の修養会が二回持たれております。

教会員の方々はこの三つの集会のために非常によく奉仕をされました。会場となる家庭の方達の労はいうまでもなく、牧師を助けて、暑さ寒さの中を当時はすべて足は自転車でしたから、今では想像もつかない程でしょう。

昭和３１年、教会が鳥居松から勝川に移る接点で８月にマコール先生を主軸に一週間の天幕伝道が勝川で行われました。春日井では初めての大々的なものでした。今の旭町商店街の糸美屋呉服店、十字薬局が立ち並ぶところが、郡役所跡の空地になって居りました。そこに大天幕が張られ、午后は子供の集会、夜は大人対象の伝道説教と毎日続けられました。この期間マコール先生を助けて天幕伝道に励まれたのが当時神学生の泥谷先生です。（現在南浦和教会牧師）

柏井町の教会建設予定地は既に買入れも済み、その年の秋から建築が始りました。

秋の長雨の続いた事で、味美町の旧家丹羽家を解体して運んであった材木が毎日の雨でぬれるだけぬれてしまい、いよいよ建物として地上に組立てられた時は、材料が古い上に雨にたたかれていたので、何んとも云えない薄ぎたない有様でしたが。あれから１０年の余も大勢の人々を収容して立派に教会の役目を果たして参りました。

忘れもしません。昭和３２年１月１５日、その日は月見町から勝川へ引越した日でしたが、教会はまだ出来上っていたわけではなく建築費支払のために月見町の牧師館は売られ、その明渡しの期日が来てしまったのです。長雨のためにここで誤算が生じましたが買われた方に余り迷惑も掛けられませんので無理を

押して引越を決行致しました。当日も午后から雨になりました。荷物もろ共来て見れば、左官は総出で荒壁を塗っております。その片隅で畳屋は表替えの真最中。覚悟して来ましたものの荷物を運び込む場所も無い始末です。当時６才の息子は風と雨に冷え込んで翌日から高熱を出してしまいました。そんなわけで引越早々最初にお知り合になったのは、勝川医院の鵜飼先生でした。戸締りも何もない工事中の一室に入って来られた先生には、さぞあわて者の引越しと見えた事でしょう。当時名城大学の学生でした城田、柴田、工藤の方々には様々の形で手を貸して頂きました。引越したものゝ会堂はまだ建築中ですから、相変らず鳥居松まで通いつづけて、献堂式後もしばらく鳥居松で日曜の午后に礼拝をしておりました。岩山長老がこの時に田楽の名城大寮から自転車で鳥居松の教会学校に教師として奉仕されました。現在高松仏生山で伝道しておられる吉田勇一氏が鳥居松教会学校の責任者でした。

さて建築中の教会の井戸は打ち込みが足りないために水不足で、（それでなくても春になると、どの家でも井戸が枯れてしまう状態でした）もらい水をしながら庭先でキャンプの真似事のような炊事をして居りました。夏ならばさぞ面白い事でしょうが、真冬でしたからたまったものではありません。そうこうするうちに建築の方も次第に進み、献堂式を前にしたある日の夕方、大垣に居られたマコール先生と美園幼稚園長のブカナン先生とが連れ立って立ち寄られました。会堂と居間との境の襖を開けて一歩中に入られた時、お二人は同時に、ベリーナイスを連発され、私達も嬉しい思いでした。説教台もベンチも並び、その上にもう一つ重みをつける様に明治のクラシックなオルガンを置いていました。この老オルガンは母からゆずられた私の秘蔵っ子で、篠山、金沢時代を通して、その間戦火から無事にのがれて、遂に勝川に来て礼拝の音楽を奏でる事になったのです。命あらばさぞ満足した事でしょう。それから１０年枯れたよい音を出し続け、ボロボロになった時、引退しました。修理に出して今は手元に置いて居りますが、有難い事に修理費は教会で出して下さいました。

立派な教会堂を見馴れた２人の宣教師達を感心させた陰には、このために汚れたガラスを磨き、床につや出しをかける等の重労働がありました。まだ婦人会も結成されては居らず会員の手も少ない時代でしたので、古家の建て直しの建築の過程で、古く汚れた建具の木枠を加性ソーダ液で主人が毎日洗っておりました。「一歩でも前進」と言い乍ら暮したこの頃の事を今思い出します。寒風の中での水仕事ですから、その時に出来た主人の親指のアカギレは其後も冬になると必ず同じところが割れて来ました。建具が入り、仕上げの時には、熊野集会の加藤姉、伊藤妙子姉が駆けつけて来られました。中村誠子姉のお母様も其の時、勤めの娘に代ってとおっしゃって同行して下さいました。後に妹さんの信子姉

も信仰を得て会員となられました。この様に助け手はありましたが、献堂式の朝にはまだ山の様な雑用が残っておりました。

昭和３２年３月１６日（土）献堂式の前夜第１回の伝道会を致しました。

明けて１７日。礼拝説教はマコール先生。この時、私とした事が今思っても顔から火の出る様な失敗をやってしまいました。

時間が来てオルガンの席に着いた私の方をマコール先生が一寸変な顔をして見ていらっしやいます。私は一瞬、会衆の方を見廻しました。誰もが至極真面目な表情をしておられます。礼拝はそのまゝ始りました。突然壇上から降りて来た主人の手がサッと私の頭上をかすめました。私の足下に払われた手拭が落ちたのです。誰もが姉様かぶりの私に注意して下さらなかったのは、それが晴れの髪飾りに見えたのでしょうか。それ程に格好よく頭にのっていたのかも知れません。

午后の献堂式には中会の各教会から大勢出席して下さり、隣組の方々も全員出席して花瓶を祝って下さいました。

会場はギッシリ詰り、立って居られる人もあり、盛大裡に教会堂として神に捧げられたのでした。

春日井の伝道の最初からお骨折り下さり、勝川移転についても先に立って援助して下さったのはマカルピン先生です。今では最初からの事を知っている者は少くなりましたが、先生は春日井教会にとって貴重な方でいらっしやいます。

献堂式が終ってからでしたが、生垣に珊瑚樹の植込みをしました。これはブカナン先生が費用を申出て下さいましたので出来ました。

これにも大変な労力がかかっておりますのでどうしても書いておかねばなりません。

城田兄達が名城大の苗木畑からリヤカーに苗木を満載して運んで来られ、植込んで下さいました。名城大農学部のあった田楽は春日井のはづれで大変遠いところでしたから、その労は計り知る事は出来ません。今では毎年生垣の刈込みに苦労しますが、当時は小さな苗木が間隔を置いて涼しげに並んでおりました。

会堂の前庭作りには、これまた城田兄が名城大教授田中先生を助けて、又々リヤカーに植木を積んで徒歩で大学から運んで来られました。正面通路の両側に白丁柘を植え、その前列をリボングラスで飾り、右手の庭には白鳥路（小道）をはさんでシャスターデージーとマギヌデージーが程よく植えられ、二本の日光桧がアクセントに植込まれました。

これは田中教授の設計になるもので、この原形を保つのには苦心しましたが、この庭を覚えている方が、今幾人居られるでしょうか。花の頃はきれいでした。今の別館のあるところですが・・・・。

勝川で最初のイースターには病癒えた高田邦彦兄と成長した加藤清子姉とが受洗されました。

高校生会は、すぐに結成され顧問格の城田兄を交えて相談の結果、育羊会と名付けました。主流の学生は名古屋学院生で、それに金城高校生、公立学校の学生も若干居りました。毎年バトンタッチよろしく引継がれて、リーダーに困る事がなかった育羊会の黄金時代が始ったのです。

婦人会も発足しました。

青年会は鳥居松時代から引継がれました。安田良介兄御一家が八事教会から転会されたのもこの頃でした。兄の愛蔵の大形ステレオに、これも秘蔵のマタイ受難曲を全曲、クリスマスの夜に皆で静かに長時間聴かせて頂いた事がありました。このため私達はリヤカーを引いてこの大切な品々をデコボコした田舎道に注意しながら教会まで運びました。皆が一様に貧乏でした。その中から会堂建築に献金を捧げ、労力を捧げていましたから、出前のラーメンでお腹を満たして、マタイ受難曲に耳を傾けていても、この時の皆の心は、自分達の教会堂が与えられた喜びと幸せに満ちていたでしょう。その様に見えた小さな羊の群でした。クリスマスのローソクに照らし出された黒々としたかたまりの群でした。

最初の頃は屋根にスピーカーをつけて、オルガンで歌い讃美歌を流していました。

会堂が出来ると教会の門をくぐる人達も数を増して、次第に教会としての形が出来て来ました。中学生、高校生が大勢出席して、若者の教会の感がありました。高校生達は聖日の大半を教会で過していました。この年頃の人達は非常に人なつっこくて、労を惜しまず、何をしても楽しそうでした。この人達を相手に過すうちに、またたくまに年月は過ぎて、伝道開始１０周年の年を迎え、秋に感謝の記念礼拝をいたしました。その折

汝の大庭に住う一日は千日にも勝れり

詩篇８４篇１０節

の聖句を記念の湯呑茶腕に記して、経済的にも独立したのです。